



大宮の盆栽町

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

朝

七時に起床。天気は上々、さらに気温もほどよく、長時間歩くには絶好のコンディションだ。今日は、同行者がいないので長い距離を歩くことにした。昔は河川敷や歴史街道を延々と歩いて旅したが、最近はずっかりご無沙汰だった。せっかく一人の休日だから、思いっきり歩くことにしよう。

コースは、まず埼玉県のJR大宮駅をスタートして盆栽町に立ち寄る。それから見沼自然公園で近年建てられたという井澤為永の銅像を見物し、そのまま歩を進めて江戸期築造の閘門式運河「見沼通船堀」を東から西へとたどり、JR東浦和駅でゴールする。地図で見ると、せいぜい三〇キロメートルだが、適当に腹がへって、さぞや晩酌がうまからう。

さて予定通り、大宮駅で降りてから、氷川神社へと速足ですすむ。氷川神社は大宮の地名の由来となつた大社であり、長い参道の美しい並木は歩行者を日差しからやさしく守ってくれる。神社の北側には、広々とした大宮公園があり、さらに公園を北へ抜けて東武野田線の線路を越えると盆栽町がある。

私が初めて盆栽町を訪れたのは、一〇年ほど前のことで、氷川神社の参拝ついでに、変わった地名なので立ち寄つたのだが、この一画だけ整然とした区画整理がされているのに大変おどろいた。直交した

広い道路沿いには草花が生い茂り、さらに町名の通り生垣に囲まれた盆栽園が門戸を開いているため、近年の緑化モデル地区なのかと思つたが、この町は九〇年ほど前に東京の団子坂（現・文京区千駄木）付近に住んでいた盆栽師たちによって拓かれた。

大正十二（一九二三）年の関東大震災によって被害を受けた彼らは、それを機に都会の塵芥をさけ、盆栽の栽培に適した広い土地と火山性土壌、新鮮な水と空気を捜し求めた。そしてたどり着いたのが、通称「源太郎山」と呼ばれた現在地だった。広い道路を確保した区画整理は、自動車の普及を見越して当初から計画されたという。

そして、大正十四年に清大園（せいだいえん）経営する清水利太郎（しみず りたろう）がこの地へ移り、盆栽業者と愛好家の理想郷「盆栽村」は産声をあげた。当時の移住規約はとてもユニークで、盆栽村に住む条件として「門戸を開放する」「二階建てにはしない」「垣は生垣にする」のほか、いかにも盆栽村らしく、「盆栽一〇鉢以上を持つ」ことが定められた。もちろん、現在はこのような規約はなく、むしろ整然とした緑ゆたかな住宅地として地価の上昇をまねき、相続税の負担が盆栽園の経営者を苦しめているという。理想郷をつくるため、先見の明をもって近代的な区画整理と、清廉な

まちづくりを行つた草創期の清水利太郎らであったが、この皮肉な結果を予想しえたのだろうか。

現在の盆栽町の前身である大宮盆栽村の設立に尽力した清水利太郎の顕彰碑は、盆栽町の小さな公園に建てられており、遠い瀬戸内海の伊予に求めたという花崗岩の巨石には、彼の功績を永久に留めておくことを祈念して、大きく「留芳」と刻まれている。



大宮盆栽町の風景

【交通】野田線 大宮公園駅から徒歩1分